

会議・視察報告

ベラルーシ訪問記

ERINA 調査研究部主任研究員
三村光弘

2020年2月8日～12日、ロシア出張の帰りに以前から少し長く滞在したいと思っていたベラルーシを訪問した。2018年7月から日本を含む74カ国の国民に対して、30日間のノービザ滞在（それ以前は5日間）ができるようになったので、ビザは必要なかったが、1999年12月に調印され、2000年1月26日に発効したベラルーシ・ロシア連合国家創設条約に関連して、ロシアとベラルーシの間に入国審査がない関係上、ロシアからベラルーシに直行する場合にはノービザ滞在ができないため、往復とも第三国を経由することとなった。

ベラルーシのノービザ入国制度

2018年07月27日から、日本を含む74カ国の国民に対して、ミンスク国民空港から出入国するときに限り、30日間のノービザ滞在のノービザ滞在が許されるようになった¹。ロシアとベラルーシの間には、連合国家創設条約が締結されており、連合国家内での出入国はロシア、ベラルーシのどちらか最初に入国する国で入国手続きを行い、入国カードは両国の共用となっており、出国の際は最後に出国する国で出国審査を行うようになっている。問題はベラルーシとロシアのビザは共通化されていないことで、ベラルーシのビザだけ、ロシアのビザだけで両国の領域を行き来しても、チェックがないため、ビザのない状態で相手国に入国できてしまう問題があった。ベラルーシが74カ国の国民（日本、韓国、インドネシア、シンガポール、米国、カナダ、英国、オーストラリア、ニュージーランド、EU諸国を含む）に対してノービザ滞在を許可するに当たって、ロシアとの事前の協

議がしっかりと行われなかったようで、ロシアビザが必要な国々のノービザ訪問者がロシアにビザなしで入国してしまう事態を避けるため、ロシアは2017年5月15日からロシア・ベラルーシ間の空路移動の乗客に対してパスポートのチェックを行うようになっており、陸路においてはベラルーシからロシアへの陸路入国を不法入国として摘発するようになっているようである。しかし、ベラルーシ側はロシアからの入国は国内移動とみなす扱いを変えていないようで、ロシアからベラルーシに飛行機で到着すると入国審査も税関検査（ユーラシア関税同盟加盟国間の移動となる）もない。

ノービザ滞在の要件がロシア以外の第三国からの航空機で、ミンスク国民空港に到着することとなっているのは、このような背景がある。筆者は今回は往路はラトビアのリガ経由、復路はウクライナのキエフ経由とした。理由は往路は単に運賃が一番安かったから、後者は経済的理由に加えてウクライナ～ロシア間を運行する列車に乗ってみたかったからである。

モスクワからリガへ

モスクワからミンスクへは、ラトビアのリガ経由で行くことにした。モスクワからリガまでの航空運賃は、燃油サーチャージ込みで3,158ロシアルーブル（約4,300円）であった。モスクワ・シェレメチボ空港を9時15分に出発し、10時20分着、時差が1時間あるため実際には2時間5分のフライトである。リガからミンスクまでは17時15分発、19時15分発で、時差が1時間あるため、実際には1時間のフライトである。リガ～ミンスク～キエフのベラルーシ航空の航空

運賃は、燃油サーチャージ込みで162米ドル（約17,300円）であった。

航空会社が異なるため、乗り継ぎ時間を多めに見込んだので、リガで約7時間の待ち時間となった。リガ空港から市内まではバスで約25分、1.15ユーロ（約133円）なので、市内を散策することにした。

写真1 リガのバスターミナル



（出所）筆者撮影

リガは中央駅と写真1のバスターミナル（国内、国際共用）が近接している。鉄道は主として貨物での利用と近距離の通勤電車が多く、長距離列車はそれほど発達していない。国内や近隣諸国との交通はもっぱらバスである。国際バスはリトアニアやエストニアとのほか、ロシアやベラルーシ、ポーランド、ドイツなどと結ばれていた。

写真2 リガの中央市場



（出所）筆者撮影

¹ 「ビザなしの30日間」駐日ベラルーシ大使館ホームページ [http://japan.mfa.gov.by/ja/visa/jp/e7ed346465cb4d7a.html]（最終アクセス2020年5月6日）

バスターミナルの横には、リガの中央市場があった。近くのスーパーマーケットはヨーロッパ風の雰囲気であったが、中央市場はヨーロッパの市場と旧ソ連の市場を足して二で割ったような雰囲気であった。

写真3 リガの中央市場で売られているパン



(出所) 筆者撮影

リガの中央市場は各種食品売り場のほか、雑貨売り場や花屋もある総合的な市場で、食品売り場のケーキ屋にはカフェが併設されており、おいしいケーキとコーヒーを楽しむことができる、観光名所としても十分通用するものであった。ラトビアはバルト三国の中ではロシア話者が多い方で、ロシアからの観光客も多い。リガの中央市場は、観光名所として有名なモスクワのダニロフスキー市場（イトインもできるレストラン兼惣菜店が多く、食品専業で土産物屋はない）と競争しても、十分勝つことができるだろう。

波乱含みのリガ出発とミンスク到着

市内からバスでリガ空港に戻る。ラトビアは現在、シェンゲン協定に加盟しており、モスクワからリガに到着するとシェンゲン圏への入域、リガからミンスクに出発するとシェンゲン圏外への出域となる。ベラルーシが多くの国民に対してノービザ滞在を認めていることは広く知られており、搭乗手続の時にビザをチェックされることはなかった。問題は出国審査の際に起こった。新型コロナウイルス感染症の伝播を防止するために、リスクの高い国々からの訪問者が入国する際に過去2週間の滞在歴や症状が出ていないかを聴き取らないといけないのだが、入国の際に係官がそれを忘れてしまっていたらしく、書式に記入することを求められた。その後、ラトビアにも感染者が増えたが、2月初旬にはまだそれほどの警戒は行われていなかった。

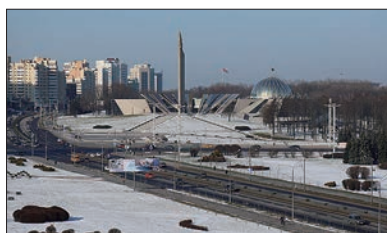
ミンスク行きの飛行機は30分ほど遅れてリガに到着し、20分ほど遅れて出発したが、ミンスクにはほぼ定刻に到着した。入国手続は非常に簡単で、滞在期間中に有効な医療保険を購入し、入国審査と税関検査を受けるだけである。入国審査では出入国カードは必要とされず（直接ロシアに向かう場合のみ記入する必要がある）、パスポートを提示するだけで大丈夫だった。

入国後、空港内の現金自動預払機（ATM）でベラルーシ・ルーブルを引き出し、市内へのバスの切符を買う。自動販売機はロシア語、英語、中国語が使える、クレジットカードも使える。途中、郊外の地下鉄駅とミンスク中央駅に停車し、中央駅に隣接するバスターミナルまで約1時間。道路状況もよく、ほとんど揺れない。バスターミナルからホテルまでは、ロシアでも使っているシェアライドアプリYandexTaxiを使って10分ほどで到着した。

ミンスク市内の様子

筆者が宿泊したホテルは大祖国戦争史国立博物館から1キロ弱の地点にあり、部屋からは英雄都市ミンスクのオペリスクや博物館、日本大使館が入居しているビルなどが見えた。市内は全体的に清潔で、走っている車も思ったよりも新しい。

写真4 英雄都市ミンスクのオペリスク（記念碑）



(出所) 筆者撮影

到着翌日の9日は、英雄都市ミンスクのオペリスクと大祖国戦争史国立博物館、カマロフスキー市場を見て回った。写真4のオペリスクの裏側に博物館があり、博物館の入口前の広場に写真5の像がある。写真6のジオラマも独ソ戦の様子をかなり詳細に再現しているが、戦争初期に前線となり、最後まで戦ったベラルーシがどのように抗戦したのかをたとえドイツ人が来たとしても、歴史は歴史として理解できる程度に、客観的に伝える内容となっていた。

写真5 大祖国戦争史国立博物館の出征兵士と女性の像



(出所) 筆者撮影

写真6 大祖国戦争史国立博物館のジオラマ



(出所) 筆者撮影

博物館の後は、写真7の市内中心部にあるカマロフスキー市場を見学した。こちらの市場は、旧ソ連圏のどの大都市にもあるような食品市場で、ベラルーシの人々の暮らしを知るには最適だと感じた。

市場には肉、家禽類、乳製品、青果のほか、パンや菓子類を売る店や、ミートパイやサンドイッチなどを調理して販売する店、コーヒーの屋台などがある。これらは旧ソ連の国々で現在でも普通にあるが、ロシアと異なり、いくつか面白い特徴があることに気がついた。

まず、写真8のようにさまざまな会社の広告が出ているが、その主体の多くが民間企業ではなく、国営企業や協同組合など、生産手段の社会的所有（つまり、社会主義的経営方式）が実施されている企業が多いことだ。次に、ロシアの都市部、特にモスクワなどでは市場でフードコートを多く取り入れたり、肉屋なら自社でローストビーフを作ったり、ハンバーガーにして販売するなど、集客力や付加価値を高めようとする努力が見て取れるが、ベラルーシでは

そこまで金儲けに熱心ではないようだ。

筆者は北朝鮮経済を専門とするが、北朝鮮の市場にも国営企業や協同組合が出店しているものの、各社の色とりどりの看板はあまりない。おそらく、このような看板は「非社会主義的」に捉えられるのであろう。が、現地の人に聞けば、どのコーナーにどの会社が出ているのかを詳細に教えてもらえる。看板を除けば、地元の国営企業が多く出店しているところなど、ベラルーシに似ている。北朝鮮も今後、経済が活性化し、国営企業や協同組合がより活発に消費者向けの商売を始めれば、ベラルーシようになっていくのではないかと感じた。

写真7 カマロフスキー市場の外観



(出所) 筆者撮影

写真8 カマロフスキー市場の内部



(出所) 筆者撮影

夜は、在ベラルーシ日本国大使館の徳永博基特命全権大使と毛利忠敦公使にお目にかかり、ベラルーシの現状について知る貴重な機会をいただいた。

ベラルーシ国立大学国際関係学部での講義とベラルーシ外務省訪問

翌10日は、在ベラルーシ日本国大使館の毛利忠敦公使の紹介で、ベラルーシ国立大学国際関係学部で主に日本語、朝鮮語、中国語などアジア諸国の語学を専攻している学生たちに対して、“Current situation and future prospects of

cooperation among Northeast Asian Countries— Rising China, the Belt and Road Initiative, and denuclearization of Korean Peninsula”（北東アジア諸国間の協力の現状と展望—中国の台頭、一帯一路、朝鮮半島の非核化）と題する講演を行った。講義が始まる前に、ミンスク中央駅付近にあるキャンパスを探していたところ、学生らしき若者を見つけて道を尋ねたら、たまたま日本語を勉強している学生とのことで、丁寧にキャンパスの入り口まで送ってくれたことが印象的であった。

100人弱の学生は非常に熱心に聞いてくれ、日本語専攻の学生は、質問を日本語で行うなど、さすがベラルーシの最高学府だと感じた。学生の中には留学生もいて、中国から来た留学生も質問をしてくれ、東欧の国での講義ではあったが、専門家の卵との交流ができ、感慨深かった。国際関係学部長のシャドゥルスキー教授と講義の前後に懇談することができ、ベラルーシが抱えている様々な問題について、専門家としての真摯な分析を聞くことができ、ベラルーシはロシアと同様、発言には社会的責任が伴うものの、専門家同士の議論については、それなりの自由が保障されている一面を知ることができる貴重な機会であった。

ベラルーシ国立大学国際関係学部での講義の後は、これも毛利公使の紹介で、ベラルーシ外務省を訪問し、アジア太平洋地域の担当者と面談する機会を得た。筆者は北朝鮮が専門なので、北朝鮮が今後世界に門戸を開いていくときに、国営企業の占める比率が大きいなど北朝鮮と比較的経済構造が似ているベラルーシが、旧ソ連崩壊後、どのように資本主義国際市場に適応していったのか、その歴史について学ぶことは意義があるので、北朝鮮の経済専門家の訪問団を受け入れてもらえる可能性はあるか、と唐突にぶしつけな質問をしたが、担当者たちは国連安保理決議に伴う国際的制裁が解除されるまでは、北朝鮮関連のプロジェクトを行うことは難しい環境にあるが、国際政治的な環境が許すならば、その時にまた考えてみようという答えが返ってきた。全く相手にされなかったが、1時間半にわたって、基本線は守りながらも、それなりに興味を持ちつつ、真摯に話

を聞いてくれた担当者には好感を覚えた。

2つの世界遺産を訪問

翌11日は、毛利公使に勧められたミンスク近郊の2つの世界遺産、写真9のネスヴィジ城と写真10のミール城を訪問した。この2つの世界遺産はミンスクの南西100キロほどのところにあり、お互いが30キロほど離れている。公共交通機関で訪問することもできるが、相当綿密にスケジュールを組まないと1日で回ることは難しい。筆者は一応、列車とバスを組み合わせたスケジュールを組んだが、当日の朝起きてみると、雨が降っていた。もう行けないかと諦めかけたが、昼前には雨がやみ、好天となった。せっかくなので、シェアライドアプリのYandexTaxiで検索してみると、70ベラルーシ・ルーブル（約3,500円）であった。値段は張るが、せっかくなので、行くことにした。ミンスク市内から郊外に出て、高速道路を通り、ネスヴィジ城に向かう1時間半ほどの道のりは、ミンスク市内とは異なり、美しい田園風景であった。高速道路を降りたところで、運転手は「この近くが私の故郷」と言っていた。

ネスヴィジ城に着いたときに、周りに客待ちしているタクシーはおろか、人も車もほとんどいないことに気がついた。帰りの足は確保していないので、乗ってきたシェアライドの運転手に、ネスヴィジ城を2時間見学した後、ミール城経由でミンスクまでいくらで行ってくれるかと尋ねてみた。答えは「50ルーブル（約2,500円）」であった。YandexTaxiは乗客から70ルーブル取るが、運転手には54ルーブルくらいしか支払われない（運転手の端末にそう表示されていた）ので、現金で50ルーブルであれば、空車で帰るよりもいいのだろう。電話番号を尋ねて、2時間後に再会することを約束してネスヴィジ城に入った。

写真9 世界遺産のネスヴィジ城



(出所) 筆者撮影

ネスヴィジ城は16世紀にリトアニア大公国の有力な貴族が建てた城が起源となっており、途中紆余曲折はあったものの、ヨーロッパでも有数の大庭園を要する城として有名である。筆者が行ったときには10人ほどしか入館者がいなかった。城の中には、ゲットマンレストランという食堂があり、ここでベラルーシの国民食ともいえるドラニキ（ジャガイモのパンケーキ）を食べたが、ミンスクで食べたそれよりも格段においしく、ボリュームがあった。レストランにもお客はもう一組しかおらず、暖冬とはいえ、2月はオフシーズンであることを実感した。

ネスヴィジ城を出た後、ドライバーに電話して迎えに来てもらう。どうも実家のある村に帰っていたようで、電話してから20分ほどして到着した。タクシーに乗ること30分、約30キロ北西にあるミール城に到着した。

ミール城は、「ミール地方の城と関連建物群」として世界遺産に登録されている。ネスヴィジ城と同じ貴族の所有していた城であるが、第2次世界大戦中はドイツ軍に接収されゲットーとして使用された歴史がある。

写真10 世界遺産のミール城



(出所) 筆者撮影

ミール城の中には、写真11のように、ロシア語、英語とともに、中国語の表示が行われていた。ベラルーシには北京から中国国際航空の直行便（北京～ミンスク～ブダペスト～北京）があり、ミンスク国民空港も中国の支援で建設されたようで、中国語の表示が各所にある（モスクワのシェレメチボ空港の案内表示も、ロシア語、英語、中国語になっている）。中国からの観光客や出張者が相当の人数になっていることを感じた。

ミール城には学生の遠足と思われる団体が来ていて、写真12のように伝統衣装を着た博物館の学芸員と当時のダンスを

一緒に踊る体験をしていた。ネスビジュ城よりも入館者が多く、説明に当たる学芸員の数も多かった。

写真11 あちこちにある中国語の表示



(出所) 筆者撮影

写真12 ミール城を見学する学生たち



(出所) 筆者撮影

ミール城からミンスクまではタクシーで約2時間。ミンスク市内に入ると若干渋滞していた。ベラルーシの道路は、首都ミンスクとその周辺の主要道路を見る限り、高速道路はロシアからEUへの通過も含めた重量貨物が多く通過するので、路面状況は完璧とは言えないが、ロシアよりも整備状況はよいようであった。

ミンスクからキエフ経由でモスクワまで

翌12日の朝、YandexTaxiでタクシーを呼び、ミンスク国民空港へ向かう。ホテルから空港までの所要時間は約45分であった。空港までの高速道路は重量貨物の通過が少ないせいも、路面状況はほぼ完璧であった。途中、ベラルーシと中国が協力して建設している「ピリーキー・カメニ（グレート・ストーン、巨石）」工業団地が見えた。

空港には出発の2時間ほど前に到着した。8時35分ミンスク発、8時35分キエフ着（時差が1時間で、所要時間1時間）のフライトである。チェックインと出国手続は円滑に進み、かなり時間が余ったので、空港の制限区域内にある免税店を見て

回った。世界共通の事項とはいえ、酒類以外は免税店と市内の商店とで値段があまりにも違う（免税店の方が倍以上高い）のに驚いた。

飛行機は時間通りに運航され、ほぼ定刻にキエフ・ボリースピリ空港のターミナルに到着した。ウクライナの入国審査も入国カードはいらず、パスポートをスキャナに通して、入国スタンプを押しておしまい。初めての訪問でないことを確認され、「そうだ」と答えるとそれで終わりだった。税関検査も特に厳しくなく、すぐに外に出ることができた。

到着ロビーではタクシーの運転手の勧誘合戦に遭遇した。ウクライナ鉄道のホームページでボリースピリ空港とキエフ旅客駅（中央駅）を結ぶシャトル列車が運行していることを知ったので、それに乗ろうとロシア語で「電車で行く」と言うと笑われた。なぜ「電車」ではいけないのかわからなかったが、駅に着いてからその理由がわかった。写真13のように、シャトル列車は電車ではなく、気動車（ディーゼルカー）であった。運賃は80ウクライナ・フリヴニャ（約320円）で所要時間は約45分であった。

写真13 ウクライナ鉄道 ボリースピリ空港駅



(出所) 筆者撮影

ボリースピリ空港駅を9時29分に発車した列車は、5分ほど遅れて、10時20分前にキエフ旅客駅に到着した。モスクワ行きの列車の発車時刻は19時36分。インターネットで購入した国際列車のチケットは、ウクライナ国内の駅で切符に引き換えないといけないので、まず引き換えを行う。その次に、駅内の売店で100ウクライナ・フリヴニャ（約400円）で携帯電話のSIMカードを購入したのち、キエフ郊外にあるヤヌコビッチ元大統領の邸宅が「メスイヒリャー」という国立公園になっていると聞いたので、そちらに向かった。

ウクライナでは以前は Yandex などロシア系の IT 企業が多数進出していたが、関係が悪化してからは撤退し、現在は Yandex は地図もライドシェアも使えなくなっている。代わりに Uber が使われているとのことなので、Uber を使って向かう。タクシー料金は350ウクライナ・フリヴニャ(約1,400円)ほど。40分ほどで到着する。入場料150フリヴニャ(約600円)を支払い、写真14の案内図を見ながら、中に入る。

写真14 ヤヌコビッチ元大統領の邸宅国立公園の案内図



(出所) 筆者撮影

「メスイヒリヤー」の中は木々が整然と剪定され、園内の池や小川にはカモがおり、のんびりした雰囲気である。入り口が高台となっており、そこから見る湖は大変美しい。ただし、今年は暖冬で気温はプラスだといえ、2月はオフシーズンようで、入場者はほとんどいなかった。

写真15 ヤヌコビッチ元大統領の邸宅から湖を望む



(出所) 筆者撮影

ヤヌコビッチ元大統領の邸宅は写真16のように立派なログハウスで、確かにいいところに住んでいたのだと思った。筆者

は北朝鮮が専門なので、人口が4,500万人と北朝鮮の1.8倍で、一人当たりGDPも最近は通貨安のためにドル建てでは減少傾向にあるものの、北朝鮮よりはるかに高いウクライナで、桁外れに豪華な邸宅であると聞いていた割には、大したことはなかったなあ、というのが本音である。ただ、湖(ドニエプル川のダム湖)の借景を利用し、庭園をこれだけ美しく作るウクライナ人の美意識には感動した。

写真16 ヤヌコビッチ元大統領の邸宅



(出所) 筆者撮影

とても美しい庭園であったが、オフシーズンで園内にカフェも営業しておらず、あまりに寒いので、バスと地下鉄を乗り継いで市内に戻ることにした。バスは、公園入り口から地下鉄2号線のヘローイウ・ドニブラー駅前までを約50分で結ぶ。地下鉄に乗り換えると約25分で市内中心部に行くことができる。キエフ地下鉄では、ビザカードとマスターカードのコンタクトレス決済に対応した自動改札機が各駅に数台設置されており、切符を買うことなく、カードでそのまま乗車できる。筆者も日本の三井住友銀行のデビットカードで試してみたが、ちゃんと乗車することができた。

市内中心部に戻ってから、ウクライナ料理店で遅いランチを食べ、カフェでお茶を飲んで時間をつぶし、19時前にキエフ旅客駅に到着した。駅前の売店で1.5リットルのミネラルウォーターを調達し、13時間

の国際列車の旅に備える。列車発車の20分前にホームに行ったが、すでに列車は到着しており、乗降口で切符を提示して列車に乗り込む。4人乗りのコンパートメントにモスクワ出張のウクライナ人の先客と2人の旅となった。ウクライナとロシア間で直行の飛行機便がない中、キエフとモスクワを結ぶこの列車は両国の首都を結ぶ重要な列車で、車両も状態のよい車両が使われており、室内も清潔に保たれていた。

ウクライナの出国審査はコトブ旅客駅から乗り込んだ係官が国境の手前の駅で運転停車中に、ロシアの入国審査は国境を超えて運転停車した駅で行われたが、それほど厳しくはなかった。しかし、1月に中国に入国したスタンプを見つけた係官が、検疫官を呼びに行き、非接触型体温計で耳の穴の温度を測られた。実際にはウクライナ人の客の方が咳をしていたが、彼にとってはあまり気分のよいものではなかっただろうし、ウクライナやロシアで新型コロナウイルス感染症が広がったときには、私のことを思い出したかもしれない。

列車はブリャンスク駅に停車した後、モスクワに向けてひた走り、ほぼ定刻にモスクワ・キエフ駅に到着した。キエフ駅には、モスクワからウクライナを通過してモルドバのキシナウに向かう国際列車が発車を待っていた。

写真17 モスクワ・キエフ駅に着いた国際列車



(出所) 筆者撮影